新同人雑誌評

【同人雑誌募集】発行ごとに【三部】、左記の宛先までお送りください。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学内
三田文學編集部 新同人雑誌評 係

佐々木義登

旗原理沙子「ききなし」（「TROIGIE」）は主人公の奇妙な体験が描かれます。大学卒業後に恩師と結婚し、映画館でアルバイトを始め、野城さんと高木さんという二人の男性と知り合いになりますが、高木さんからは暴力を受け、野城さんとはむやみに性行為にふけります。半年ほどでバイトをやめ、離婚した主人公はやがて旅行ライターになりました。ある日上司と仕事で榛名山へ行き、「ききなし」と呼ばれる占いのようなものを体験することになります。かつてアルバイトで体験した半年間の出来事についてききなしてもらったところ、背景には三つの家を巡る壮大な物語がありました。「ききなし」とはこの世界に起こる様々な現象の因果関係を明らかにする、ある種啓示のようなものなのですが、それは我々を取り巻く科学的な秩序とは異質の、一見荒唐無稽とも思えるような内容なのでした。にもかかわらず、世界を織りなす秩序を明らかにしているように思えてしまうのは、「ききなし」が小説や物語というものの本質を持ち合わせているからではないでしょうか。同じく**旗原理沙子「鬼の胎内」**（「閑窓」Vol.6）も世界そのものの認識と、アイデンティティーという問題を掘り下げた作品で、短編ながら圧倒的な存在感を示していました。

猿渡由美子「ふたたびの」（「P.」45号）の主人公は訪れた病院の待合室で、十年近く前にアルバイト先でお金を借りていた男と偶然再会します。二人は深い仲ではありませんでしたが、彼との再会に特別な思いを感じています。やがて主人公が重い病を得て、入院しなければならない状況にあることが分かってきます。気のいい隣人や母親も健在ではありますが、主人公は一人ひっそりと入院の準備をします。身近に人はいるものの、病や老いによって心に一抹の寂しさを抱える彼女が胸に思い描くのは、偶然再会した男の面影でした。現代を生きる中高年の抱える孤独感を淡々とした筆致で描いた作品で、大変リアリティがありました。

大木芙沙子「みずうみ」（「夢でしかいけない街」）の主人公みずうみは、ソルトレイクシティで開催される冬季オリンピックを我が子と一緒に見ることを願って母がつけた名前です。しかしみずうみが七歳になる前に母は亡くなりました。要領よく社会生活を営むことが難しいみずうみですが、見たことのないソルトレイクシティの風景を思い描きながら成長します。コミュニケーションの困難さを感じつつも、寄り添ってくれるパートナーも現れます。冬の寒さと降る雪を背景に訪れる、静謐とも言えるラストが秀逸でした。

渡谷邦「水路」（「あるかいど」74号）は夫が主人公に似た女性を見つけたことから始まる物語です。後日、その女性犯罪軽視の態度を見せます。久高は言葉を尽くして対応し示談交渉に入りますが、内間の「気持ちがとっちらかって」回答は保留されます。そんな折、久高は司法修習同期の敷島との関係を変えたいとも思うのです。「弁護士になるような強い女の人には、私の気持ちはわからない」と内間に言われながら、実際には葛藤し冷たい痛みに苦しむ久高を的確に伝える筆致で、金属製の密閉容器のなか水がじゃぶじゃぶしているような響きが印象的です。事件や敷島との関係の出口のなさを示唆する終わり方でした。

ここではないどこかを夢想する「夢でしかいけない街」は非常によく練り上げられた作品集でした。そのなかの**大木芙沙子「みずうみ」**は、冬季五輪の開催地ソルトレイクシティから名づけられた小田湖（みずうみ）の物語です。目をつむると「白くてさむくてうつくしい湖」が見え、「いつでもそこへいけるのよ」と、亡くなった母は言いました。そうしてみずうみは「瞼のうらにある湖」に安らぎながら生きていますが、やがて「目をとじて浮かぶ景色」が「目をあけてみる景色」に似ていると思うのです。「そこ」はここにあると知ったときの機微が質感ゆたかに描かれています。

渡谷邦「水路」（「あるかいど」74号）の語り手は、自分に「似た女」と関わります。「似た女」は北村といい、離婚に応じず暴力をふるう夫から逃げ、弁当工場の夜勤をしています。それは、現在の夫と結婚する前の語り手と似た状況でした。北村は住まいを見つけるまで語り手の家に滞

加藤有佳織

旗原理沙子「ききなし」（「TROIGIE」）が傑出していました。語り手の赤石は、「心が擦り切れてしまって」いた学生時代や、年上のバルザック研究者と結婚し「自尊感情を損なわれる地獄」にいてバイト先の同僚に殴られたり別の同僚と寝たりする「わけのわからない時期」を過ごしました。バイトを半年ほどで辞めて夫と別れ、現在はフリーの旅行ライターとなった彼女が、群馬県榛名山へ取材に訪れます。人気だと教えられたのがききなしでした。「それはこういうことなんじゃないかってとりまとめるようなこと」をするという女性にあの「時期」について話すと、戦後にききなしを試みた赤石観作らのめぐり合わせによると言います。さらに帰り際、ききなしの続きとも思われることを告げられます。「聞き做すのも見做すのも創作だった」わけですが、結末で響き渡る鳥たちの鳴き声は、「創作」と事実を峻別することの不確かさをうたうかのようです。語りのスリルに満ちていました。

上地庸子「支え」（「樹林」Vol.693）では、那覇で弁護士をする久高が性犯罪被疑者の弁護をします。居酒屋で店員の内間瞳に抱きつき逮捕された大城伸治は、接見で性差別や

佐々木評

性に偶然出会った夫婦は彼女のアパートまで後をつけて行きます。その女性が夫からDVを受けているところに居合わせた主人公は、彼女と深く関わってゆくことになります。女はやがて主人公の自宅で寝泊まりするようになり、そこから仕事に通い始めます。しかし体調を崩してしまうと、主人公が彼女の代わりに仕事に向かいます。女の人生が主人公の過去と重なり、最後には女と主人公が入れ替わるかのような瞬間を迎えます。女は過去の自分なのか。沼のような水路を背景に、一人の人間が存在することの意義が問い直される作品でした。

キンミカ「アノニマス バットウィー アーリアル」（「樹林」Vol. 692）の主人公はハーフの女子高生です。両親の不和を抱えつつ、彼氏や友人たちとそれなりに青春を謳歌しているようです。ある日、友人の男子高校生が、バッハとあだ名をつけた民族学校に通う女の子に告白すると言い出したことで、主人公が自らのアイデンティティーの問題と正面から向き合う機会を得ることになりました。タイトルの日本語訳にもなっている「名もなき私達はそれでもリアル」という言葉が、主人公が本名を口にするラストシーンと見事にシンクロしており、鮮やかに作品を締めくくりました。

峯本つづき「亀のゆくえ」（「樹林」Vol. 694）は小学六年生の少女の視点で、様々な人間関係が語られる話です。心を病んで宗教に頼る母、悪い噂の立つ近所のおばさん、中学受験のために主人公と疎遠になっていく同級生の美央ちゃん、登場人物それぞれが生きづらさを抱えています。冒頭、主人公が飼っていた四匹の亀が消えてしまうのですが、消えた亀は、作品の後半で結局隣家のおばさんが一匹だけ見つけてくれて、主人公の元に返ってきます。少女はその亀を庭石の上に置きます。四匹の亀は、本作の主要な四人の登場人物を指しているかのようです。両親が離婚し、結局母の故郷の島へ引っ越すことになった主人公は引っ越しの準備のさなか、近くの河川敷を訪れ、どこまでも歩きはじめる場面で作品が閉じられます。日常が少女の目線で淡々と描かれつつ、不確かで寄る辺なき人間の営みが、外側からストーリーを支えている点が本作の魅力だと感じました。

少女の視点から描かれた家族と日常という点では**作田優「父が死んだら祝杯を」**（「TROIGIE」）も特筆すべき作品でした。ディテールの書き込みが見事で、生き生きと人物が立ち上がってきました。

それ以外では、**名倉弓子「アンバランス」**（「樹林」Vol. 693）、**瀬戸千歳「餓虎」**（「夢でしかいけない街」）、**浅田厚美「ルービックキューブ」**（「別冊關學文藝」第六十六号）、**渡辺庸子「オレンジ色のスカート」**（「あるかいど」74号）、**中山文子「はぐれて」**（「樹林」Vol. 692）を興味深く読みました。

加藤評

在し、体調不良の際は語り手が代わって工場へ出かけます。端正でそこはかとなく不穏、細部まで巧みな作品です。

猿渡由美子「ふたたびの」（「P.」45号）では、手術を控えた語り手が、10年ほど前にお金を借りた「男」と大学病院で再会します。流産や離婚を経験し独り暮らしの長い語り手は、病を得てあらたな孤独感を背負っていますが、男にまた借金をしようと心をつよくするのです。自分を突き放す引き締まった語りが彼女というひとをよく表現しており、隣人の金田との関係が心地よく軽く愉快です。

峰さそり「初夏の薄片」（「樹林」Vol. 693）では、14歳の「あなた」の変容する身体、それをめぐる危うい思考と経験が描き出されます。そして語り手は、「あなた」を思いながら、幼い娘の「さらりと丸い体」を抱きしめ「つよく生きてほしい」と思うのです。二人称の語りと水中に光が跳ねるプールという場所が効果的です。

水沢郁「親指日記」（「文芸エム」第11号）は、17歳の古森みどりの日記です。幼い頃に事故で右手の親指を失ったと、母から聞いていました。そのとき離れてしまった自分の「親指姫」の行方を想像したり、「心はいつも泥沼だ」と吐露したり、闊達でシニカルな魅力がありました。

佐伯厚子「雲の行方」（「樹林」Vol. 694）の晴子は左膝の骨折を機に、自宅に閉じこもっています。再始動のきっかけは、スーパーで調理員から手渡された揚げたてのちくわ天でした。天ぷらうどんを作って啜りそしてひとりの食卓で泣く場面に、熱い出汁の匂いがしみじみ漂います。

八満屋というデパートが舞台の作品集「閑窓 Vol. 6」に佳品が揃い、定年退職した母を手伝うため帰省した語り手が街の変化を知る**熾野優「道の真ん中でふたり」**や、店内の大理石に暮らすアンモナイトを描く**丸屋トンボ「大理石に泳ぐ」**に寂しくも温かい読後感がありました。

岩手県山田で炭焼きを生業としてきた祖父と孫娘を描く**咲井田容子「卯年炭（うどしずみ）」**（「北の文学」第86号）、文学賞を受賞するも小説家として安定しない我が身について推敲作業になぞらえて語る**池上洋平「気が付けばいつも窓際に」**（「文芸エム」第11号）、ニュージーランド人の父と日本人の母を持つ高校生が自分の所在を、恋人やその友人、友人が恋する民族学校生との関係のなかで模索する**キンミカ「アノニマス バットウィー アーリアル」**（「樹林」Vol. 692）、民生委員の小窪正剛をとおして高齢化する地域住民を写すなかに太平洋戦争の影が落ちる**国府正昭「不発弾」**（「海」第107号）、「なにもかもが、なにかに利用」可能なレゴが好きな「おれ」が疾走するように語る**木耳「ばらばら」**（「前衛アンソロジー」3）も興味深く読みました。

「文學界」への推薦作●お二人の討議の結果、推薦作は、**旗原理沙子「ききなし」**（「TROIGIE」）、**大木芙沙子「みずうみ」**（「夢でしかいけない街」）、**渡谷邦「水路」**（「あるかいど」74号）の三作になりました。